平成１２年８月３１日

企画調査報告書
（平成１２年８月分）

ドミニカ共和国企画調査員
吉井和弘

１．業務の概要

ラ・ルイサ地区開発に関する企画調査を継続した。

１）ラ・ルイサ地区開発プロジェクトに係わる農地庁々内会議

8月31日に予定されていた第２回ラ・ルイサ地区開発に係わる連絡協議会は、農地庁々内会議となった。8月16日の政権交代に伴って、農地庁の長官から課長代理レベルまで全面的に新しい顔ぶれになったためである。外部の関連機関を召集する連絡協議会の前に、庁内会議を開いてプロジェクトの全貌を知っておきたいという要望が強かったためである。

国際協力課 Birelsa Acosta 課長が召集した庁内会議には、約15名が出席した。この２ヶ月の間に、プロジェクトはいろいろの分野で動きはじめ、関連する課の数が増えた。会議の概要は次の通り。

(1)経緯：開発調査要請書の作成－企画課 Alfonso Viscaíno
(2) 第２回ラ・ルイサ地区開発に係わる連絡協議会－報告者
(3)コミュニティ・ｱﾝｹｰﾄ調査－社会開発課 Juan Durán
(4)果樹展示圃場－報告者
(5)果樹収益性調査－報告者
(6)モデル入植事業とコミュニティのインフラ整備－阿部企画調査員

プロジェクトは、モデル入植事業とコミュニティのインフラ整備を実施するのが目的であることが明確になった。またｱﾝｹｰﾄ調査の結果、学校、診療所、道路と排水路の現状が明らかになり、教育省、厚生省、公共事業省がプロジェクトに絡んできた。

このプロジェクトは、あくまでも農地庁のモデル入植事業であって、農地庁がリードしなければならない。報告者は、JICA がその一部を手助けするに過ぎないのだということを強調した。

写真 1.
ラ・ルイサ地区開発に係わる技術班の報告の後、いろいろの質問をする農地庁の新しい課長と課長代理。農地庁にて(8/31)。

2）ラ・ルイサ地区コミュニティのｱﾝｹｰﾄ調査

ラ・ルイサ地区は国道ｻﾝﾄ・ﾄﾞﾐﾝｺﾞｰﾓﾝﾃ・ﾌﾟﾗﾀ沿いに発達した集落である。南限はﾓﾝﾃ・ﾌﾟﾗﾀ県とﾃﾞｨｽﾄﾘﾄ・ﾅｼｮﾅﾙ県の間を流れるオサマ川、北限はミホ川である。カオバ川を境にして南がﾗ・ﾙｲｻ・ﾌﾟﾘｴﾀ、北がﾗ・ﾙｲｻ・ﾌﾞﾗﾝｶである（添付資料１：地図）。

ﾗ・ﾙｲｻ・ﾌﾟﾘｴﾀの一部にｴﾙ・ﾊﾞﾃｲと呼ばれる元サトウキビ労働者のハイチ人の部落がある。またﾗ・ﾙｲｻ・ﾌﾞﾗﾝｶの一部には、ｴﾙ・ﾗｳﾚﾙという部落がある。ｴﾙ・ﾗｳﾚﾙは国道ｻﾝﾄ・ﾄﾞﾐﾝｺﾞｰﾓﾝﾃ・ﾌﾟﾗﾀ沿いにあって、ﾗ・ｴｽﾄﾚﾗからの道路の交差点の北から、ミホ川までにある。

ラ・ルイサ地区コミュニティのアンケート調査をするに先立って、コミュニティの予備調査を行った。農地庁地域開発課の社会学士３名の協力を得た。1993 年に実施された国勢調査によると、ﾗ・ﾙｲｻ・ﾌﾟﾘｴﾀ 246、ﾗ・ﾙｲｻ・ﾌﾞﾗﾝｶ 128、ｴﾙ・ﾗｳﾚﾙ 78 計 448 家族がラ・ルイサ地区に住んでいた。

ラ・ルイサ地区 Victor Guzman 村長によると、現在 1,350 家族だという。地元で活動している厚生省保健員によると 1,070 家族だという。１家族平均 5.5 人として約 5,900-7,200 人がラ・ルイサ地区に住んでいることになる（表 1）。

ｱﾝｹｰﾄ調査は、6 日にわたって 319 家族を対象に行った。保健員の推定する家族数の 30%を調査したことになる。

表 1. ラ・ルイサ地区の家族数とｱﾝｹｰﾄ調査対象家族数

No.	部落	家族数 93 国勢調査	家族数 JAD 報告書	家族数 ﾗ・ﾙｲｻ 村長	家族数 保健員	ｱﾝｹｰﾄ 調査対象 家族数
1	ｴﾙ・ﾊﾞﾃｲ			120	120	31
2	ﾗ・ﾙｲｻ・ﾌﾟﾘｴﾀ	242	176	500	500	142
3	ﾗ・ﾙｲｻ・ﾌﾞﾗﾝｶ	128	350	400	300	104
4	ｴﾙ・ﾗｳﾚﾙ	78		300	150	42
計		448	526	1,320	1,070	319

写真 2.
ラ・ルイサ地区コミュニティでのｱﾝｹｰﾄ調査の内容を検討する技術班。左から、社会開発課 Juan Poché、阿部企画調査員、社会開発課 Juan Durán、同 Victor Medina、企画課 Alfonso Viscaíno。農地庁にて(8/15)。

現在ｱﾝｹｰﾄ調査の結果を分析中であるが、要約は次の通り。

(1)住民

ｴﾙ・ﾊﾞﾃｲ：ｾﾝﾄﾗﾙ・ﾘｵ・ｵｻﾏ製糖工場のサトウキビ切り人夫として、ハイチから来た人とその子孫がほとんどである(95%)。製糖工場が閉鎖になり、サトウキビの仕事がなくなって住民の仕事がなくなってしまった。他にできる仕事がないために、他の活動もできずに非常に貧しい失業者となってしまった。住民は時々ある農夫の仕事につく程度であり、日本人入植事業は雇用の創出になると期待している。

ﾗ・ﾙｲｻ・ﾌﾟﾘｴﾀ：ｾﾝﾄﾗﾙ・ﾘｵ・ｵｻﾏ製糖工場に働いていた、ドミニカ人従業員（人夫監督、ﾄﾗｯｸﾀｰ運転手、秤番など）に政府の建てたシャレと呼ばれるｺﾝｸﾘｰﾄ建ての家が97軒ある。現在では、農業、農夫、人夫、商売人などをしている。砂糖公団から年金をもらって生活している人もある。

ﾗ・ﾙｲｻ・ﾌﾞﾗﾝｶ：ラ・ルイサ地区の社会経済活動の中心である。診療所、学校（小中合せた8年生まで）、商店、オサマ協同組合がある。

ｴﾙ・ﾗｳﾚﾙ：社会経済レベルにおいて、ﾗ・ﾙｲｻ・ﾌﾞﾗﾝｶとﾗ・ﾙｲｻ・ﾌﾟﾘｴﾀとの中間に位置する。

(2)井戸水の供給

ｴﾙ・ﾊﾞﾃｲ：手押しポンプの井戸が1本ありｴﾙ・ﾊﾞﾃｲの住民だけでなく、ﾗ・ﾙｲｻ・ﾌﾟﾘｴﾀからも水を汲みにくる。あと2本（風車と手押しポンプ）は破損している（表2）。

ﾗ・ﾙｲｻ・ﾌﾟﾘｴﾀ：NGOﾌﾟﾛｶﾘﾍﾞが建設した会員制の井戸が4本ある。会員20-30名程度で、建設時労働奉仕するかまたはRD$1,000.00ﾍﾟｿを支払い、月RD$5.00ﾍﾟｿの維持費を徴収している。月1回、会員が集まり井戸の運営について相談する。会員でなければ水を汲めない。但し、会員が自分の分を他人に譲れば、譲られた人はその分だけ汲むことができる。

ﾗ・ﾙｲｻ・ﾌﾞﾗﾝｶ：井戸が5本ある。2本は会員制の井戸である。会員は54と76名である。建設時の費用は会員あたりRD$500.00-600.00ﾍﾟｿ、月RD$5.00ﾍﾟｿの維持費を徴収している。3本は、水中電気ポンプである。その1本は診療所に、1本はチーズ屋に、それぞれ誰にでも水を提供している。残りの1本は、個人のものである。

ｴﾙ・ﾗｳﾚﾙ：2本の会員制の手動ポンプがある。NGOﾌﾟﾛｱｸﾞｱが協力して掘った井戸である。

表2．ラ・ルイサ地区の井戸の分布

部落	公共井戸 故障中	公共井戸 手動 ﾎﾟﾝﾌﾟ	公共井戸 水中 ﾎﾟﾝﾌﾟ	会員制井戸 手動 ﾎﾟﾝﾌﾟ	個人井戸 水中 ﾎﾟﾝﾌﾟ	計
ｴﾙ・ﾊﾞﾃｲ	2	1				3
ﾗ・ﾙｲｻ・ﾌﾟﾘｴﾀ				4		4
ﾗ・ﾙｲｻ・ﾌﾞﾗﾝｶ			2	2	1	5
ｴﾙ・ﾗｳﾚﾙ				2		2
計	2	1	2	8	1	14

(3)水道水の供給

ﾗ･ﾙｲｻ･ﾌﾟﾘｴﾀ、ﾗ･ﾙｲｻ･ﾌﾞﾗﾝｶおよびｴﾙ･ﾗｳﾚﾙの国道沿いの家には、水道がひいてある。ただし、水は月に１回とか２ヶ月に１回にしかこない。水は非常に汚れているという。

井戸水、水道水ともに量は不十分である。雨がもっとも大切な水をもたらす。足らない分は、遠くの川から運んでくる。

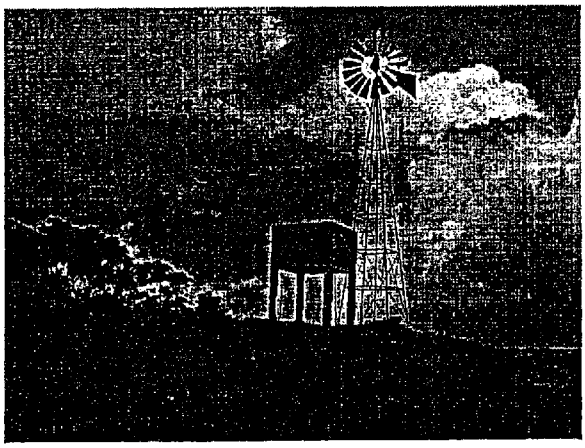

写真３.
ｴﾙ･ﾊﾞﾃｲにある風車を利用した井戸ポンプ。２年程前にパッキングが古くなったために稼動していない。お金を出し合って修理をしようという動きは全くない。井戸を掘ってポンプをつけるのは容易であるが、維持管理できるシステムを作ることは容易ではない(8/15)。

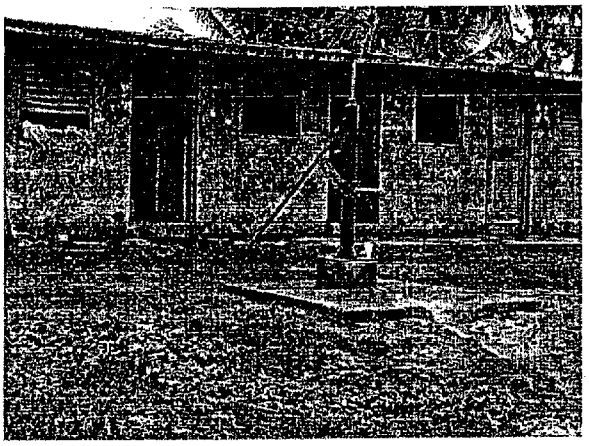

写真４.
ｴﾙ･ﾊﾞﾃｲに住む 120 家族の唯一の井戸。ポンプに鎖をつけて使用時間を制限して渇水を防いでいる。生活用水は、数キロ離れたオサマ川から運んでいる。後方の長屋は、サトウキビ労働者の典型的な宿舎(8/15)。

写真５.
井戸水は十分ではない。雨は重要な水源である。どの家でも雨水をためて、生活用水にしている(8/28)。

(4)住宅

エル・バテイ：もともとセントラル・リオ・オサマ製糖工場が、ハイチ人労働者のために建設したものであった。1998 のハリケーン・ジョージで全壊され、住民は残骸の材料を利用して何とか住宅を再建した。

残りの部落：エル・バテイに比べると、木、ブロック、セメントにトタン屋根のよい住宅である。しかし、エル・ラウレルの国道から離れて奥にはいると、かなり貧しい家がある。ラ・ルイサ地区全体で、トイレのついた家は非常に少ない。NGO プロカリベなどが協力して、便所の建設を進めている。

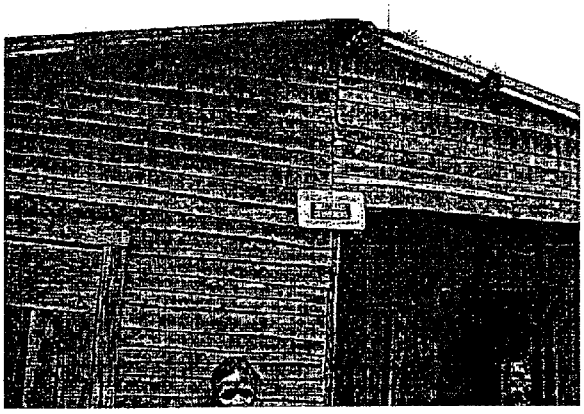

写真６.
エル・ラウレルにある典型的な住宅。ココナッツの板は最も重要な建材である。ハリケーン・ジョージのあと、アメリカの援助で建設された住宅である(8/29)。

写真７.
USAID が材料を提供し、NGO ドミニカ総合開発院(IDDI)が再建したという。貧困層への効果的な援助には、政府機関や NGO の協力が必要である(8/29)。

(5)診療所

ラ・ルイサ・ブランカには診療所があり、医師が１名いてサント・ドミンゴまたはモンテ・プラタの専門医に患者を紹介している。残りの部落には診療所はない。人口 7，000 人に診療所一つとは十分でない。多くの貧乏人は、大都市の専門医にかかることはできない。応急措置をしてくれる診療所が、ラ・ルイサ・プリエタにも是非必要である。

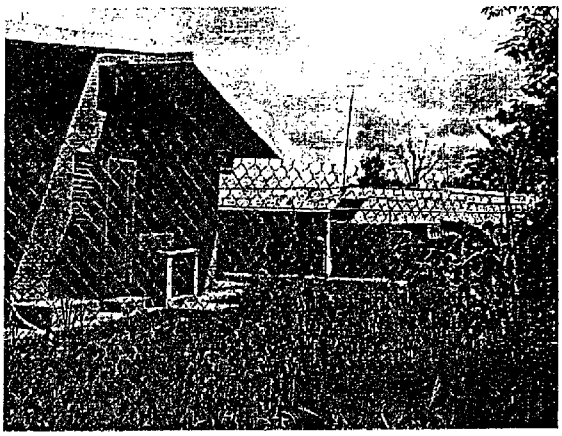

写真 8.
ﾗ･ﾙｲｻ･ﾌﾞﾗﾝｶにあるラ・ルイサ地区にあるただ一つの診療所。深井戸があって、水中ポンプで水をくみ上げて住民に提供している。診療所の外に流しがあり、水道栓 2 本がみえる(8/28)。

(6)学校

ﾗ･ﾙｲｻ･ﾌﾟﾘｴﾀには 6 年生まで、ﾗ･ﾙｲｻ･ﾌﾞﾗﾝｶには 8 年生まで、ｴﾙ･ﾗｳﾚﾙには 5 年生までの学校がある。給水設備のない学校である。学校に井戸を設置してやれば、近くの住民も利用できる（表 3）。

ラ・ルイサ地区には、6，000 人以上の人が住んでいる。地区全体で、高校を一つ建設する必要がある。

表 3．ラ・ルイサ地区の学校設備

部落	教室	用水ﾀﾝｸ	井戸	電気	発電機	運動場
ﾗ･ﾙｲｻ･ﾌﾟﾘｴﾀ	3	1	なし	あり	なし	なし
ﾗ･ﾙｲｻ･ﾌﾞﾗﾝｶ	6	0	なし	あり	なし	あり
ｴﾙ･ﾗｳﾚﾙ	2	0	なし	あり	なし	なし

(7)農業

自分の職業を農業という人は、一番多いが全体の 23%に過ぎない。その次に多いのが工事人夫(17%)、商業(12%)、日雇農夫(11%)の順である。

ｴﾙ･ﾊﾞﾃｲでは、小さな家の庭にユカ、サツマイモ、ガンズルなど、家で食べるために作付けしている程度である。ﾗ･ﾙｲｻ･ﾌﾟﾘｴﾀでは数軒の農家が、ﾗ･ﾙｲｻ･ﾌﾞﾗﾝｶではもう少し多くの農家が、ﾓﾝﾃ･ﾌﾟﾗﾀの入植地で 100 ﾀﾚｱの畑作をしたり、ﾗ･ｴｽﾄﾚﾗ入植地で 50－70 ﾀﾚｱの水田を持っている。ｴﾙ･ﾗｳﾚﾙでは、5－ 7 ｋｍ離れたところに 5－10 ﾀﾚｱの畑作を行っている。

結論として、ラ・ルイサ地区の農業は家の庭でつくる自給自足農業から、３－６ha の畑作や水田と色様ざまである。入植地で計画している果樹中心の農業を、技術移転して地域の農業開発を行うという構図は描けない。サトウキビの跡地を利用した農業技術を開発して、他のサトウキビの跡地に技術移転するという構図は、描くことができる。

(8)ラ・ルイサ地区のインフラ整備

アンケート調査の結果、これまで農業省あるいは農地庁だけで考えていたプロジェクトから、他の省を絡めたラ・ルイサ地区コミュニティ総合開発

プロジェクトにする必要性がでてきた。ラ・ルイサ地区のインフラ整備をするためには、少なくとも次の機関の協力が必要である。

上下水道院(Instituto Nacional de Agua Potable y Alcantarillado-INAPA)：

-井戸の建設と維持管理に関与する

-水道設備を修理整備する。

大統領府ﾌﾟﾛｺﾐｭﾆﾃｨ：住宅改造と便所の建設。

厚生省：ﾗ･ﾙｲｻ･ﾌﾟﾘｴﾀに診療所を建設する

文部省：ラ・ルイサ地区に高校を建設する。

公共事業省：ﾗ･ﾙｲｻ･ﾌﾞﾗﾝｶからﾗ･ｴｽﾄﾚﾗに至る国道の補修工事

企画課と地域開発課がﾌﾟﾛﾎﾟｰｻﾞﾙを作り、もう一度農地庁々内会議を開き、ラ・ルイサ地区総合開発プロジェクトの方向を確認する。そして、第２回ラ・ルイサ地区開発に係わる連絡協議会を開催する予定である。

３）入植地

大使館によれば、８月８日に農地庁から26軒に仮地権が発行された。これで26軒の農家に正式に使用権つまり耕作権が認められたことになる。残りの土地譲渡を受ける権利のある46軒の移住者が土地を受け取る可能性は少ない。

4）営農計画

(1)入植者アンケート調査

26軒の入植予定者を対象にアンケート調査を実施した。14軒から回答を得た（回収率54%）。解答者の２軒が農業自営者、8軒が非農業自営者、2軒が給与所得者であった。

非農業自営者と給与所得者の３軒がしばらく入植するつもりはなく、土地を貸してもよいと考えているのみで、残りは何かを植えてみたいと考えている。土地を売却してもよいと考えている人はいなかった。農業自営者とそれ以外の人ともに、果樹をやってみたい者と畜産をやってみたい者の約半分づつに分かれた。

いつ入植つもりかという問いに対して、多くの人は柵ができてからと答えた。これは、現在入植地に牛や馬が放牧されているという事情を反映している。入植地に家を建てて住むつもりの人はいない。ほとんどの人は通勤で農業をやり、入植地に家を建ててもせいぜい管理人を住まわせることを考えている。

農業自営者は、ラ・ルイサ入植地を第2の生産地として考えているのに対して、非農業自営者と給与所得者は、第1の生産地として考えている。

⑵展示圃場

ラ・ルイサ入植地に果樹の展示圃場を設置するための準備を行った。サトウキビが長く栽培されていた土地である。サトウキビの根が土壌表面をはびこっているので、まず深く耕す必要がある。農務省ﾓﾝﾃ･ﾌﾟﾗﾀ支局農業機械サービス計画(PROSEMA) Radamés Cruz 課長に 110 馬力のﾄﾗｯｸﾀｰを依頼した。

ﾓﾝﾃ･ﾌﾟﾗﾀは牧畜地帯である。深く耕す農機具はない。ｻﾌﾞｿｲﾗｰは手に入れることができなかった。土壌を深く耕して裏がやす大型ディスクですら、容易に手に入らなかった。農地庁ﾓﾝﾃ･ﾌﾟﾗﾀ支局 Sixto Antonio Leyba 支局長の協力でﾌｱﾝ･ｻﾝﾁｪｽﾝ入植地 Luis Espinal 代表から、28ｲﾝﾁの大型ディスクを借りることができた。そして8月29日に耕起した。

ﾌｱﾝ･ｻﾝﾁｪｽﾝ入植地は、ラ・ルイサ入植地と同じく元サトウキビ畑を農地に転換している事業である。Leyba 支局長は、ラ・ルイサ入植地での果樹展示圃場に関心を示した。農地庁の他の入植地、特に元サトウキビ畑を農地に転換している事業地に役立つからである。

写真 10.
ラ・ルイサ入植地ロット 59 番の展示圃場の隅に立てたコンクリートの杭は壊されてしまった。壊れた杭を持ち上げているのは農地庁 Chalas 国際協力課課長。大使館の介入により、犯人をつきとめ抗議してもらった(8/11)。

写真 11.
ロット 59 番の境にｺｺﾅｯﾂの苗 60 本とﾏﾎｶﾞﾆの苗 40 本を植えた。しかしながら、破壊行為は続く。翌日、苗は全て引っこ抜かれてしまった。ｺｺﾅｯﾂはﾏﾁｪﾃで根本から切られてしまい、もう芽が出ない(8/25)。

(3)果樹の収益性調査

前述の展示圃場では、次の五つの果樹を栽培する：

1)ガヤバ

2)レモン

3)ﾊﾟｯｼｮﾝ･ﾌﾙｰﾂ

4)サポテ

5)サクランボ

この５つの果樹の収益性を調査するためのTRを作成した(添付資料２)。そして、３社からﾌﾟﾛﾎﾟｰｻﾞﾙを提出させた（添付資料３）。

〔1〕ドミニカ農業企業連合社(Junta Agroempresarial Dominicana, Inc.-JAD)
RD＄500,000.00ﾍﾟｿ（＄33，333.00ﾄﾞﾙ）。
ﾌﾟﾛﾎﾟｰｻﾞﾙの内容が要約されているので、詳しい方法はよく分からない。値段が相場以上と思われる。

〔2〕経済社会調査専門組織(Organización Profesional para la Investigación Economica y Social-OPINES)
RD$250,800.00($16,720.00)
方法が説明されていて、よいﾌﾟﾛﾎﾟｰｻﾞﾙである。文書の誤りがある。

〔3〕農牧技術＆工学(TECNOLOGIA AGROPECUARIA E INGENIERIA-TEAGROING)
RD$230,500.00($16,370.00)
方法が具体的に説明されていて分かりやすい。文書に誤りがあるが、内容といい、値段といい３つのﾌﾟﾛﾎﾟｰｻﾞﾙのうちで一番よいと思われる。

３．関連事項

特になし。

４．今後の計画、その他

最終報告書作成

帰国９月14日ｻﾝﾄ･ﾄﾞﾐﾝｺﾞ発 12:10(AA588)-９月16日成田着 16:15(JL005)

以上